

援助職のリカバリー

《22》

～「セックスレス」に立ち向かう(3)～

袴田 洋子

11月に京子が末期がん患者の克彦の担当薬剤師になってから、早くも1ヶ月が過ぎようとしていた。初めて克彦に会った時、部屋の中でよろけて転んだ克彦の病状は、京子たち専門職も少々戸惑うほどの速さで進行していた。がん細胞は、克彦の脳や脊髄にも転移をし、12月中頃には、完全に自力での歩行ができない状態になっていたからである。70代のがん患者の進行は、80代の患者と比べてやはり早いように感じる。京子は担当のケアマネジャーや主治医と連絡を取りながら、克彦の服薬支援を行なった。

歩けない克彦の服薬は、日に三度訪れる訪問ヘルパーが手伝っていた。ヘルパーは、服薬支援だけではなく、ベッド上で食事をするようになった克彦の身の回りのことをさまざまな面で支援していた。トイレにはもはや行けなくなっているために、克彦は、オ

ムツをつけられ、排泄は、すべてベッド上で行われていた。がん細胞が脊髄に転移し、脊髄損傷の状態となっていたために、克彦は排尿や排便の感覚も失っていたのだ。歩行ができず、ベッド上だけの生活になりながらも、意識状態はしっかりしている克彦がどんな想いでいるか、訪問して処方薬を届ける度に、京子は心が痛んだ。

しかし、京子がいっそう、気がかりに思っていたことは、克彦の家族のことだった。担当になってから、初回訪問の時に会った孫息子以外とは、まだ誰とも会っていない。克彦に、長男夫婦のことを尋ねても、「忙しくやっているみたい」としか答えないので、それ以上、つつこんで聞くことが出来なかった。担当ケアマネジャーは、何か知っているようだったが、薬剤師の立場として、何か「困っている」状態になっているわけではないので、ケア

マネジャーに連絡してまで、家族のことについて聴いてよいものかどうか、悩んでいた。が、結局のところ、連絡しないままになっていた。

そんな理由で、少しもやもやした気持ちのまま年が明けて、新年最初の克彦の処方薬を届けに行った時に、京子は、初めて長男と会った。会ったというよりは、遭遇した、という方が正しいかもしれない。その日、いつも通りに克彦の自宅玄関のチャイムを鳴らして、ドアを開けると、目の前に、見知らぬ男が立っていた。京子は、心臓が止まるかと思うほど驚いたが、すぐに克彦の長男であることを理解し、落ち着いて挨拶の言葉を口にした。「はじめまして。あさひ薬局の滝沢京子と言います。お父様の処方薬をお届けしています。ご長男さんですよ？」長男は、京子の顔をじっと見ながら、「ああ、お世話になります。同情はしないでください。親父は、外面がいいんで」と、一息に言うと、「用があるので」と、そのまま靴を履き、出て行ってしまった。呆気にとられたまま、京子は、閉まった玄関ドアを眺めていたが、はっと我に返り、克彦の部屋に向かった。「あけましておめでとうございます。克彦さん、体調はどうですか？」と、京子が言うと、克彦は、いつもの穏やかな口調で、「大丈夫ですよ。みなさ

んのおかげです」と、いつもと同じ言葉を繰り返した。京子は、痛みの具合や副作用の症状など、克彦の身体状況を丁寧に確認し終わると、一瞬躊躇したが、長男と会ったことを克彦に伝えた。克彦は、「ああ、今日は、まだ仕事じゃないんだね。正月休みなのかな」と言った。じゃないんだね、という克彦の言葉から、今日、この自宅の中で、克彦は長男と顔を合わせていないのだと京子は思った。

「息子さん、確か、病院でリハビリのお仕事をされているんですよね。お忙しそうですね」と言う京子に、克彦は、「頑張ってきた子なんだよ。今は、管理職にもなって、信頼もされて、よくやってるんだよ」と言った。

薬局に戻る帰り道、京子は、克彦と長男の親子関係をあれこれ想像していた。長男の克彦に対する態度は、ずいぶん厳しい感じがする。末期がんという状態なのに、同じ家に住んでいながら、顔を合わせていない様子は、ちょっと何かありそうだ。それに、長男の妻もいるはずだけれど、全く気配がない。初対面の人間に、同情しないでくれって、なかなか普通は言わないように思う。普通は言わないことを言う、ということは、それなりの何かがあるということだ。色々な家族がいるのは、百も承知。それぞれの家族に、それぞ

れの物語がある。それを踏まえた上で、自分は自分の専門職としての役割を全うする。それでいい、と思うのか、思い込もうとしているのか、京子は、わからなくなっていた。理由は、克彦の長男だった。玄関で初めて会った克彦の長男は、じっと京子の顔を見ていた。京子は、睨まれているとは感じなかった。むしろ、今にも泣き出しそうな、小学生の子どもを見ているような感覚だった。そして、どこか自分に似ている、とも思った。自宅で看取る、と主治医から聞いているけれど、本当に大丈夫だろうか、気にかかった。

薬局に戻り、残務整理をして、京子は自宅へ帰る途中、朝食の食材と洗濯洗剤を買いに、スーパーに寄った。夫は、毎日、社内食堂で夕飯も食べて帰ってくるから、京子は、いつも一人で、簡単に済ませていた。こんな生活が、もう10年以上続いている。寂しいと感じているのか、感じることを無駄と思うのか、それすら思わなくなっているのか、自分でもわからなかった。夫と不仲なわけではない。休みの日には、一緒に買い物に出かけたり、映画を観に行ったりもする。ただ、日々の会話が、何も無い。今日、こんなことがあった、あんなことがあったと、話すことが、何も無い。こんな日常が、これから、今後もずっと続くのか、と考

ると、何か、満たされない感覚がじわりと広がってくる。今日、訪問した克彦親子の関係性を「冷えている」としたならば、自分たち夫婦は、「冷えていない」と言えるのだろうか。子どもがいない夫婦にとって、二人でいることの意味は、どこにあるのだろうか。京子は、地平線に果てしなく続く細い道を一人で歩いているような感覚になった。